

双月刊行有料宅配誌 / 編集兼発行人・中村公省

蒼蒼

第 95 号

株式会社蒼蒼社 / 東京都町田市森野 2・26・16

2000年10月10日 発行
宅配料2年12号1000円
(小額郵便切手可)

中国での電子メール活用法

村田忠禧

(横浜国立大学教授)

五月一日から九月三〇日まで、日本學術振興会と中国政府教育部との間の研究者の相互派遣プロジェクトの一環として、中国に五カ月間滞在している。これまで私は一週間や二週間の短期旅行はそれなりにして

いるが、数カ月におよぶ長期滞在は初めてのことで、日々新発見という貴重な体験を重ねている。生れも育ちも現住所と同じという川崎原住民なので、家族と離れて長期にわたって一人で生活するというのも、実は今回が初めてのこと。そんな私の中国一人旅を強力に支えてくれたのが電子メールである。北京に着いた直後に自宅に電話をかけたのと、上海の浦東空港で娘の到着が遅れたことについて、自宅に問いあわせの電話をかけたこと以外に、中国に来てから国際電話をかけたことはない。その代わり毎日、電子メールで家族や友人との連絡をとっており、異国における一人旅の寂さとはまったく縁のない生活をしている。今回ほど電子メールの便利さを実感したことはなかったもので、ここにその体験を披瀝しておきたい。

中国式インターネット接続方法

人民元が国際的に流通する通貨となっていない現状では、中国でクレジットカードが利用できるところはきわめて限られてい

る。そのためインターネットへの接続方法も中国独特のやり方になっている。本格的に統一された市場経済が成立していないという現段階での社会、経済状態を反映して、中国のインターネットには次のような特徴がある。

第一に、まだ全国を網羅したプロバイダが存在していない。接続方法は北京、上海、天津などそれぞれの都市ごとで異なっている。ただし大きく異なるのではなく、若干の相違があつて統一されていないというだけのことである。

第二に、クレジットカードが効力を発揮しない社会での接続方法として、公開のユーザ名、公開のパスワード(したがってパスワードの機能を果たさない)による接続方法が存在する。具体的に紹介すると、たとえば北京の場合には電話番号が169、ユーザ名も169、パスワードも169、上海、南昌の場合にはそれらがいずれも8163、天津の場合には2163、福州になると電話番号とユーザ名は上海と同じく8163だが、パスワードは空白のまま、

といった具合である。これは私のように短期間、中国に滞在し、各地を動き回る人間にとつてはとても便利なサービスである。なお使用料は毎分〇・〇七元である。

とても簡単に便利な方法ではあるが、それぞれ都市によって数値が違ふこと、また個人を特定せずに接続させるというやり方が果たしてよいものなのか、いささか疑問と不安が残る。

この他に留学生用宿舎には201電話というのがあるが、201電話カードというプリペイドカードを購入することで、国際電話やインターネット接続が可能になる方法もある。この201電話カードもそれぞれの都市においてだけ通用するもので、全国共通ではない。

また163網カードというのも存在し、このプリペイドカードの場合には、ユーザー名は指定、パスワードも事前に設定されているが変更可能である。落としてしまった場合、他人に利用されることのないように、パスワードは早急に変更したほうがよいということである。北京電報局が

発行している163網カードには100元（前には50元というのもあったが、現在はなしのこと、あるいはたまたま売り切れでなかったのかもかもしれないが、この点は未確認である）のプリペイドカードがある。このカードの場合、ユーザー名、パスワードはカードに印刷されており、電話番号は北京地区内では163でよい。接続状況はかなり安定していて、169ではつまく繋がらない時でも163なら繋がる、ということがよくある。また地方の都市の公開接続方法がわからない時には、長距離電話をかける形で、北京の163網カードを使ってアクセスするという方法を取れば、どんなところでもインターネットに繋がる。メールアドレスなら接続時間はきわめて短時間なので、100元のカードはかなり長期間使える。長期滞在する人でない場合にはこのカードはお薦めである。

メールアドレスの取得

中国でインターネットに接続できることになれば、日本のサーバーにある自分の

メールを読むことは可能となる。メールソフトのアカウントの設定でPOP3、SMTPをそれぞれのメールアドレスの指定するものにすればよい。

しかし実際にはこの方法はあまりよくない。なぜかという点、中国と日本との間の通信に時間がかかりすぎ、時間切れのために遮断されてしまうことがよく発生するのである。これは中国と日本とを結ぶ回線が細すぎるために発生する現象であつて、今のところどうしようもない。

二フテイの場合には、どのような方法であろうとインターネットに接続できさえすれば、そこで自分の二フテイのID、パスワードを入力して二フテイに届いたメールを読んだり書いたりすることができるのでとても便利であるが、これもやはり通信に時間がかかる。私は他の方法がうまくいかない時にのみ二フテイを用いることにした。この他にG R I Cを利用しての接続方法もあるが、私はまだ利用したことがない。矢吹晋教授の体験だと、中国の場合、やはりパスワードの確認のための通信に時間が

かかり、問題があるとのこと。いずれにせよ、日本のメールサーバーに直接アクセスを試みる方法は、日本と中国との回線が細いという現状においてはあまり望ましい方法ではない、といえる。

つまり中国に来たら、ご当地・中国のメールアドレスを取得すべし、という結論になる。

中国で新しいメールアドレスを取得するのは非常に簡単で、いろいろなホームページにフリーメール（免費メール）のサービスがある。街を走るバスや街頭広告からも簡単に見つけ出すことができる。北京の場合だと北京電信局 www.bta.net.cn、上海だと東方網 www.eastday.com.cn などで容易にメールアドレスを取得できる。

今年の六月末の段階で中国には六五〇万のメールアドレス保持者がいるそうだが、そのうちの五六一〇万（八六％）は免費メールの利用者だとのこと。この免費メールが多いことも中国のインターネットの特徴の一つである。

郷に入っては郷に従え、であって、私も

さっそくそれを利用することにし、北京電信局の btaonline.net.cn と 163.net の二つのメールアドレスを取得した。いずれもインターネットに接続してホームページから必要事項に回答するだけで、簡単にオンライン登録ができた。ただし無料であることが原因なのか、動作が不安定なことがよく発生し、接続できなかつたり、送受信ができな、あるいは時間がかかりすぎる、という問題が頻繁に発生する。日本の場合、メールサーバーに問題があつて、利用者が接続できなかつたり、定期的なメンテナンスのためにサービスの提供を中断するといった事態が発生する時には、必ず事前もしくは事後に、プロバイダのほうからそのことについてのメールが届くのは当たり前のことだが、中国ではそのような親切な対応はほとんど見られない。免費メールゆえにサービスも免費になつてしまつていようで、あまり喜ぶべき事態ではない。

メールアドレスというものは多く持つべきではないのに、私は二つも（本当は北京師範大学が用意してくれたのを含めると三

つ）持っているのは、一方のサーバーが不調になったら即座にもう一方に切り換えて送信することができる態勢を確保しておくためである。このように書くとかなりセキリティー対策がしっかりしているように思われるかもしれないが、実は二つのメールアドレスを使うようになったのは、先に取得したメールアドレスによる通信ができない事態が一時的に発生し、あわててもう一つ取得しただけのことである。あまりに急速にメール利用者が増えているため、不安定な状態が発生しているのであろう。まさに電子メールの爆発的流行は今日中国社会の縮図のような面がある。

メール転送サービスの活用

中国でのメールアドレスを取得し、そこからのメールの送受信ができるようになっただけでは、実は問題の一部分が解決しただけにすぎない。日本で利用しているメールアドレスに届いたメールを中国でも読めて返信が書けるようにする必要がある。前述した通り、メールソフトに日本のメール

アカウントのPOP3、SMTPが設定されていれば、理屈のうえでそのメールサーバーにアクセスすることは可能なのだが、交信に時間がかかっつうまうまいかないことがよく発生する。これを回避するには、中国のメールアドレス宛に日本のメールアドレスに届いたメールを自動的に転送させ、中国のメールアドレスで日本のメールを読むことができるようにすればよいわけである。

メールの転送サービスは日本の多くのプロバイダで行なっているので、設定は簡単。プロバイダのホームページにアクセスして、メール転送サービスを行なっているところに入つて、新たに取得した転送先の中国のメールアドレスを指定すればできるはずである。私の場合、日本では基本的に三つのメールアドレスを使用している。大学のメールアドレス、ニフティ、東急ケーブルテレビである。しかも日本でメールを見る時には、最終的にすべて東急ケーブルテレビのメールアドレスに集中するように転送の設定をしているので、そのメールアドレス

スにアクセスするだけで、すべてのメールが読めるようになっていた。今度はそれを新たに取得した中国のメールアドレスに転送すればよいのである。

この転送サービスを利用したおかげで、私が中国に来ていることを知らない方（あわただしく出国したので、ほとんどの方に通知をしなかった）からメールをいただいても、問題なく対応できた（と思っている）。郵便のほうでは大学に届いたものを転送してもらった時に、書き留めで送ってもらわなかったため、行方不明になってしまつて入手できないという困つた事態が発生した。メールではそのようなことは発生していないと思われる。ただしメールでも、送信したのに届いていない、あるいは数日たつてようやく受信する、というようなことがよく発生する。おそらくこれはサーバーに問題が発生していて、その間のメールの送受信が停止されてしまつたからであろう。このような不安定要因をいろいろ抱えているのがまさに現在の中国である。

中国語のメールの読み書き

中国語のメールを読んだり書いたりするには、表示するフォント、入力するためのIMEが必要になる。これらはインターネットエクスプローラをインストールする時に「標準」のインストールをするのではなく、「最小もしくはカスタマイズ」のインストールを選択すれば可能になる。

後者を選択すると、いろいろな設定が選べるが、大切なのは多言語処理の部分で、言語の自動選択、簡体字表示、簡体字入力などそれぞれの必要に応じて、日本語以外の表示フォントと入力方法を選択すればよい。中国語（GB）の入力には、このマイクrosoftが無償で提供しているグローバルIMEのほかに、日本で発売されている中国語入力・印刷ソフトを使つても直接GB入力ができる。グローバルIMEとそれらとは共存できないので、もしGBコードを直接入力できるソフトをお持ちの方は、あえてグローバルIMEを選択する必要はない。あとはメールを書く時に、中国語の

メールを書くのであれば、メール本文の書式で、エンコードを簡体字中国語にし、IMEをGBコードが直接入力できるものに切り換えればよい。件名はGBで書かないほうが賢明である。メールの形式はリッチファイル形式よりもテキスト形式にするほうが望ましいので、オプションの送信の設定のところ、メールの形式をテキスト形式に指定しておいたほうがよい。マイクロソフトの初期設定はリッチファイル形式になっているので、文字データのみを送信する人はテキスト形式に設定を変えておいたほうがよい。

デジカメを活用しFAXを使わない

五月一日到北京に到着してからまず最初にやったことは、実は日本でやり残した仕事。毛沢東伝「下巻」(みずず書房、七月刊、九〇〇円)の校正、人名索引、年表、訳者あとがきの作成であった。まるまる一カ月ほとんど宿舍の新松公寓に閉じこもってその仕事に専念した。その時に、日本から届いたFAXがただの感熱紙に印刷されたも

のでしかないのに一枚あたり五元のお金を取られることに不合理性を感じ、どうしたらFAXを使用しないことができるか、ということをおもひこぼした。メールアドレスを持っていない人には直接メールで通信すればよい。しかしFAXはあるけれどもメールアドレスはない、という人もいる。その場合には、自宅の娘にメールを送り、そこでプリントアウトしたうえで、自宅のFAXを使う、という方法を用いた。中国からの送信にはもつとお金がかかるので、これは大正解である。しかし『毛沢東伝』の校正の場合には、とりわけ地図の点検の場合には文字情報ではないので、この方法は使えない。

そこで思いついたのは、今回初めて持ってきたデジタルカメラの活用である。デジタルカメラの接写機能はなかなかのもので、名刺大のものまでかなり鮮明に写すことができる。しかもFAXと違ってカラーで送ることができる。校正用のデータであるなら、高密度な画素である必要はないし、JPEG形式のファイルなのでファイ

ルも大きくならない。

このやり方でみずず書房との間で校正のやりとりをすることができたので、郵送するよりも速く、しかもFAXよりも鮮明に画像のやりとりができ、おかげで『毛沢東伝』下巻は七月一九日に発行することができた。

この他にも旅行のメモ代わりにデジカメを活用しているが、その日のうちに撮影した映像を確認し、しかもパソコンのハードディスクにダウンロードし、撮影の記録のために使用しているスマートメディアの映像を消去して再度使用しているので、二枚のスマートメディアでかなり使えている。これまで重たい二コンの一眼レフと多くのフィルムを持ち歩いてきたのに比べると、大変な変化である。カメラとしての使い勝手という点ではまだまだ、というのが実際のところだが、ともかくデジカメは便利であり、旅行の記録をするためには必需品といつてよいかも知れない。

北京師範大学专家楼にて 九月二日

ウィンドウズ2000 で中国語を使う

吉田良夫
(Smitty) 外国語フォーラムボードマネージャ

今年二月に発売されたWindows 2000 Professional (以下Windows 2000)は、主にサーバー用OSとして利用されていたWindows NT 4.0をベースに、Windows 98のマルチメディア機能、プラグアンドプレイなどの機能を統合して、操作性が良く、信頼性の高い業務向け用OSとなったというのがうたい文句となっているが、海外との関わりが強い人にとっては、Unicodeを利用した「多国語サポート」が有用で便利な機能である。中国語を扱う人にとっても非常に便利な機能ながら、市販の解説書を見てもほとんど紹介されていない、この多国

語サポートに関して紹介を行いたい。この機能を利用すると、Windows 2000だけで中国語の文書作成や電子メールのやりとりができるのももちろん、中国大陸や台湾、香港で販売されている各種アプリケーションソフトを使用することができる。

強力な多国語サポート機能

Windows98以前シリーズのWindowsは、各国で使用する言語とそれを記録するための文字コードが異なっていたために、使用する言語が違っていると互換性がない例が多かった。特に、中国語に関しては、大陸のGBK (またはGB)コードを使用したバージョンと、台湾、香港向けのBig5コードを使用したバージョンがあって、互換性が無いため不便を感じさせられていた。

しかし、Windows 2000は、多国語の同時使用を前提に設定されたUnicodeを内部コードとして使用しているため、従来のGBKコードやBig5コードを使ったソフトやデータでも、コード変換をして読み込んでしまえば、支障なく処理できる仕組みになっている。実は、以前のWindows NTやWindows 98も、従来の地域毎のコードからUnicodeに変換しながら読み込んで処理

するという仕組みになっていたのだが、基本的に一つの言語とUnicodeとの間だけでコード変換するように作られていたために、例えば、日本語版Windows 98で中国語を扱おうとすると、コードを変換して表示してくれるソフトを導入しなければならなかったのである。

その点、Windows 2000は、メニューやヘルプなどの表示こそ各国版で異なっているが、Unicodeへの変換は、どの国で売られているものも多国語に対応できるようにになっている。つまり、日本で売られているWindows 2000を使って、設定変更さえしければ、GBKコードやBig5コードを使ったアプリケーションソフトを実行させることが可能なのである。

その上、「入力ローカル」という多国語を入力するための機能を最初から備えており、必要に応じて、随時切り換えながら使用できるため、付属のワードパッドや市販のOffice 2000といったソフト上で、日本語と中国語の混在はもとより、さらに韓国語、ヒンディー語、タイ語といった異なる文字体系の言語までも混在させた文書やデータの作成ができるようになっていく。

導入するには

前身であるWindows NT 3.51、Windows NT4.0を使用している方は、アップグレード用パッケージ(実勢¥4,800)〜¥16,800程度)を購入することが出来る。また、Windows 95、Windows 98を使用している方で、二〇〇〇年九月二日から二月三一日までの期間限定で、通常より約四〇%安い価格(実勢¥14,800)〜¥16,800程度でアップグレード用パッケージが購入できるので、この機会を利用するのが得かも知れない。(ちなみに、もともと日本での日本語版Windows 2000の販売価格の方が、香港、台湾、大陸のバージョンよりも安いので、中国語でメニュー表示などをさせる必要がなければ、日本で買うのが賢明。)

導入に必要なハード環境は最低次の通りとなっている：

Pentium 133MHz以上のマイクロプロセッサ
32MB以上のRAM(推奨は64MB以上、最大は4GB)
1GB以上のハードディスク等の空き容量
VGA以上の高解像度ディスプレイ
CD-ROMドライブまたはDVD-ROMドライブ

IP

マウスなどのポインティングデバイス
お手持ちのハードウェアのスペックを確認されるとお分かりの通り、一九九七年以降に発売された機種ならば大抵使用可能だ。もちろん、これ以上の性能があることに越したことはないし、中国語を活用するには、後述の様に、ハードディスクは最低4GB以上の空きを用意して、「デュアルブート」に対応させるのも手である。ただし、古い機種だと扱えるハードディスクの容量に限界があったり、OSの設定変更が必要となる場合があるので、ハードディスクドライブを取り替える場合は、本体の説明書を確認しておくことが肝要である。

インストールの注意と方法

Windows 2000の導入に際して注意が必要なのは、まず、モテル、RAMカード、内蔵カメラなどの周辺機器が対応しているかどうかという点で、もし対応していないハードウェアがある場合、導入後に使えなくなってしまう可能性がある。また、Windows 2000を一旦インストしたら、アインストールするにはハードディスクを再フォーマットする必要があるので、導入

は慎重に行った方がいい。使えない周辺機器やソフトウェアが出る可能性があるかどうかを、アップグレードパッケージの購入前に知るために、Windows 2000対応アナライザというチェックプログラムを実行してみることをお勧めする。マイクロソフトの公式サイトのお

<http://www.microsoft.com/japan/windows2000/upgrade/>

の中からダウンロードすることができるようになっており、これを実行すると、問題の出る可能性があるハード、ソフトを列挙してくれる。また、前記のサイトでは、修正プログラムのダウンロードができるようになっており、各ハード、ソフトウェアのサポート情報へもリンクが張られているので、ドライバやプログラムの更新で問題が解決できるのかという情報も事前に確認できる。

アナライザの実行結果を見て、問題なさそうだと確認できれば、実際にインストールをしよう。中国語を使う事を考えてインストールする場合、次の三つの方法が考えられる。

a. 既存のOS(Windows 98など)に上書きして、Windows 2000にアップグレード

b. 既存のOSとは別に、Windows 2000を新規にひとインストールする

c. 既存のOSとは別に、Windows 2000を新規に複数インストールする

aは、インストールによって従来使用していたOS、例えばWindows 98が消えて、Windows 2000だけが残る方法で、メモリーやハードディスクなど、従来のデータや環境は引き継いでくれるようになっていて。但し、Windows 2000に対応していないソフトなどは使えなくなる可能性がある。bを行うと、従来使用していたOSはそのまま残るので、Windows 2000を使うか、従来のOSを使うかを起動時に選択する。いわゆる「デュアルブート」構成となる。cは、bの応用だが、後述するように、例えば日本語用のWindows 2000と中国語用のWindows 2000を別々にインストールして、デュアルブートにする事が可能である。いずれの方法も、Windows 2000のCD-ROMだけで設定できる方法なので、OS切り換え用ソフトを購入する必要はない。

どれも望ましいかは、ハードの性能や使い方によって違うので、一概に言えないが、もし、継続使用中のパソコンにインストールするのであれば、とりあえずbの方法で、従来の環境を残したまま、別途追加し

てみるのが安心だろう。但し、b、cの方法でインストールする時は、従来のWindowsが使っているドライブとは別のドライブに設定しないとイケないため、別のドライブを追加しているか、ハードディスクにパーティションを切って、仮想的に複数のドライブに分割されていないといけない。そうならない場合は、別のドライブを追加するか、いったん、ハードディスクをフォーマットして、パーティションを切る必要があるが、フォーマットすると、いままでのデータや設定は全て消えるので、十分に注意されたい。

インストール方法を決めたら、実際のインストール作業は、Windows 2000のCD-ROMを入れれば、プラグアンドプレイ(中国語で言えば「即插即用」)の機能によって、自動的に最適な条件に合わせて進めてくれる。ハードディスクをフォーマットしたばかりの状態からインストールできるが、すでにWindowsが入っている状態ならば、Windowsを立ち上げてからCD-ROMを入れると、自動的にインストール用のダイアログボックスが出るので、「Windows 2000のインストール」を選ぶ。「Windows 2000セットアップ」画面で、アップグレードか、新規インストールかを選択する。(ここで前

記のaかbかを決定。以下はbの例)ライセンス契約に同意し、プロダクトキーを入力、EULAにアップグレードするか(しない方が無難)を選ぶと、インストールが始まり、再起動される。システムの検査がなされてから、「セットアップへようこそ」という画面となり、修復か追加かの選択後、キーボードの種類を特定し、ドライブを選択する。ハードディスクの空きを確認しつつ、現在使用していないドライブを選ぶと、Windows 2000が追加インストールされる。

さて、次が肝心の「地域」設定で、「カスタマイズ」すると、中国語が扱えるようになるが、これは後で変更できるので、とりあえずは「カスタマイズ」せず、デフォルトのままインストールすると日本語対応の状態の設定が行われる。個人用設定で使用者の名前を入れ、ネットワーク用のコンピュータ名(機種名などでよい)とadminisrator(管理者)のパスワード(毎回、起動時に入力するので、忘れないこと)を入力、日付と時刻の設定をしたら、しばらくはプログラムにお任せして待つと、「セットアップは完了しました」とメッセージが出て、インストールが完成し、自動的に再起動する。立ち上がったら、機能に問題がないか、「スタート」「設定」「コントロール

パネル」「システム」「ハードウェア」「デバイスマネージャ」をチェックしておく。

さて、通常の日本語環境で、中国語の表示と入力可能な「入力ロケール」を追加する場合、タスクバーのIMEのアイコンを右クリックすると出るプロパティ(または「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「キーボード」)の「入力ロケール」で、追加する事ができる。ダイアログボックスの「追加」を押すと、追加可能な入力ロケールが選択できるので、まず「中国語(中国)」か「中国語(台湾)」を選択して、さらにロケールに合った入力システム(IME)を選択する。「MS Pin Yin8」が簡体字と繁体字を切り換えて打てるので便利で、使いやすい。他に「Shuang Pin(双)」、「Zheng Ma(鄭碼)」、「New Cang Jie(新倉頡)」、「Unicode(單碼)」なども必要に応じて選べるが、一度に一つしか追加できないので、繰り返し操作する必要がある。



これで、日本語環境で中国語を扱うことができるようになった。付属のワードパッドや市販のOffice 2000、一太郎など中国語が使える事を確かめてみよう。追加した入力法の切り換えは、通常画面下にあるタスクバーのアイコンをクリックするが、

[Alt]+[Shift]を押すことのできる。中国語の電子メールを出したい場合も、付属のOutlook Expressを使って、新規作成するメールの「書式」の「エンコード」を「簡体字中国語(GB2312)」または「繁体字中国語(GB95)」に設定してから、同じコードの入力システムを使って打てばよい。相手が閲覧できるならば、「Unicode(UTF-8)」を選んで、日本語と中国語、さらには韓国語、タイ語等までも多言語が混在したメールを作成することも可能である。

中国語のフォント

「中国語(中国)」と「中国語(台湾)」のロケールを追加すると、NSIMSun(簡体字系) SimHei(簡体字系) SimSun(簡体字系) Mingliu(繁体字系) PLinliu(繁体字系)の各フォントが使用可能となる。Unicode 2.0に規定された二万字余りのCJK統合漢字は、いずれのフォントでも全て表示できるが、「骨」や「筆」など一部の字体がフォントによって異なるので、印字、表示する場面にに応じて使い分けが必要である。

スクリーンキーボード

中国語の入力法の内、倉頡輸入法や新注音輸入法は、入力キーに合わせたキーボード配置を画面に表示して、それをマウスなどでクリックして入力することもできる。他にタイ語、ヒンディー語、タミール語なども「スタート」→「プログラム」→「アクセサリ」→「ユーザー補助」→「スクリーンキーボード」で、特殊なキーボード配置を画面に示す事が可能となる。画面に示された字が見にくい場合は、「設定」でフォントの設定を変更するとよい。中国語モードにする時、「」や「」などの記号の配置が日本語キーボードと異なるのでスクリーンキーボードを使うのも一つの手である。

中国語用外字集の利用

Windows 98までは、中国語Windows用に作られた外字と日本語Windows用に作られた外字は形式が異なっていたので、互換性がなかったが、それらの外字ファイルはWindows 2000ならば同様に使用することができる。例えば、Unicode Ver. 3.0でも不足している広東語と固有名詞用の漢字などを集めた外字集香港増補字符集なども利用できる。方法は簡単で、外字ファイルを、WINNT\FONTS(上書きインストール)

ツールした場合は「WINDOWS\FONTS」フォルダにコピーすると、「eudc_01.ttc」という名前のファイルに変わり、使用可能となる。なお、Windows 2000 では、外字は六四〇〇字まで利用可能で、Windows 98 が一八八〇字までだったのに比べるとかなり多い。

中国語口ケールの使用

先に述べた方法で、日本の市販ソフトが使え、Unicode 対応のソフト上で中国語を扱える環境が整ったわけだが、中国大陸や台湾で市販されている従来の GB 2312 を使おうとすると、これでは正しく使えない。日本語を基本言語として使う設定にしている時、例えば GB 2312 を読み込もうとした時に、一バイトカナ(いわゆる半角カナ)混じりの日本語コードと誤認して、文字化けが起きるのである。これは従来の Windows 98 などと同様の現象だ。これを回避するには、中国語(簡体字)の GB 2312 または繁体字の Big5 を基本言語に設定変更してやる必要がある。

基本言語を中国語に設定するには、「コントロール」を変更する。「スタート」「設定」「コントロールパネル」「地域のオブ

ション」「全般」にある「システムの言語設定」で「簡体字中国語(Simplified Chinese)」または「繁体字中国語(Traditional Chinese)」を選んで「規定値」に変更すると、システム口ケールの選択「ダイアログボックスが出るので、これも今選んだシステムに合わせて「中国語(中国)」か「中国語(台湾)」に変更する。初めて選択すると、一回目からは、必要なファイルは、既にハードディスク上にインストールされています。」などというコメントを書いた「全般」ダイアログボックスがあるので、「はい」を選ぶ。続いて「地域のオブションの変更」ダイアログボックスが出て、再起動するか問われるので、「はい」を選ぶ。再起動が済むと、見た目は前と変わらないが、中国語を基本としたシステムに変わっているはずである。試しに、Big5 コードか GB 2312 で書かれたテキストファイルを開いてみるとよい。コードを間違えていなければ、中国語が正しく表示されるはずである。

これで、例えば上海でソフトを購入して来ても、台北でソフトを購入して来ても、一台のパソコン上で使うことができるようになる。日本と比べて、安価にソフトを購

入して来ることができると、中国の企業データベースや、英中辞書、中国語音声入力といった日本にないソフトも使えるようになり、仕事にも役立てる事ができる。

言語別のマルチブート

前述のように都度口ケールを変更して、中国語を使ったり、日本語に戻したりすれば、基本的に日本語のソフトと中国語のソフトが使用できるが、再起動が面倒なのと、使用途中に間違えて別の言語用のソフトを起動して、文字化けが起きるような不都合が生じる可能性がある。

そこで、Windows 2000 のマルチブート機能を応用して、複数のドライブに、言語別の Windows 2000 をインストールしてやるという手がある。ハードディスクなど余裕がないとできない方法で、厳密には違約となる方法かも知れないが、日本語以外に、簡体字中国語と繁体字中国語を規定値にした Windows 2000 を用意しておくのである。こうすると、アプリケーションソフトも、中国語コードに合わせて異なるドライブにインストールできるので、整理しやすい。二つ目以降のインストールの場合、インストール時に「地域」ダイアログボックスが

出た時に、ロケールを「カスタマイズ」しておく方が、後で変更するよりも手間が省ける。

筆者の場合、日本語(Shift-JIS)、簡体字中国語(GBK)、繁体字中国語(Big5)を規定値の言語にしたWindows 2000をハードディスクのC:\、D:\、E:\ドライブに入れているが、インストールを終えたままの状態だと、電源を入れてしばらくすると出る「オペレーティングシステムの選択」画面で「Microsoft Windows 2000 Professional」を選ぶと同じ文字が三つ並んだ中から起動ドライブを選ぶことになってしまい、これがどの言語に設定していたか分からなくなる。そこで、これを区別できるように、それぞれ「Shift-JIS」「GBK」「Big5」等の字句を追加しておくと、この変更は、通常ハードディスクの最初のルート「ライン」(C:)にある「boot.ini」を書き換える事で行える。「スター」「プログラム(P)」「アクセスリ」「メニュー」を使って「c:\boot.ini」を開き、次の例のように入力「Shift-JIS」「GBK」「Big5」の字句を追加する。あくまでも例なので、他の部分はむやみに書き換えないう方が無難だが、「timeout」の後の数字は、ブートローダーが事前に指定したOSを自動的に選んで起動

させるまでの秒数。「default」に続く行が自動起動するOSとそのフォルダ指定となっているので、必要があれば書き換えて上書き保存すると良い。(デフォルトのOSは「スター」「設定」「コントロールパネル」「システム」「詳細」「起動/回復」でも設定できる)

```
[boot loader]
timeout=20
default=multi(0)disk(0)rdisk(0)
partition(1)%\WINDOWS
[operating systems]
multi(0)disk(0)rdisk(0)partition
(1)%\WINDOWS="Microsoft Windows 2000
Professional Shift-JIS" /fastdetect
multi(0)disk(0)rdisk(0)partition
(2)%\INNT="Microsoft Windows 2000
Professional GBK" /fastdetect
multi(0)disk(0)rdisk(0)partition
(3)%\INNT="Microsoft Windows 2000
Professional Big5" /fastdetect
```

以上、図がないので分かりにくい部分も少なくないと思うが、使いこなすと便利なWindows 2000を活用して頂ければ幸いです。

村山義久著(前時事通信上海支局長)

上海シンドローム

中国インサイド・レポート

超高層ビル、コンビニ、結婚しないニッポン、過労死、老人過剰社会、新興宗教、ニッポン大衆文化の流行……等々。その中国社会の深層に果敢に切り込んだ秀逸の特派員レポート。「疾駆する先端都市」「ホモエコノミクスの生態」「犯罪の影」「ニッポンへの愛憎」の四部構成。A5判二四〇頁 定価二四〇〇円+税 二〇〇〇年十月刊

三菱総合研究所編

中国進出企業一覽

二〇〇〇 二〇〇一年版

中国市場に展開する日本企業のビジネス拠点の調査報告書・第十四版目。旧版を根本的に改訂し、情報の正確度アップ、会社別の拠点、香港拠点の収録、索引の充実などを図って新登場。A5判 定価一万五千元+税 二〇〇〇年十一月刊

『醜い中国商人』

【解題】以下は、蒼蒼社近刊の武俊平著、算武雄訳『醜い中国商人 私营企業経営者の実像』の序文である（『中国老板批判』内蒙古人民出版社、九九年刊）。「老板（ラオバン）」という言葉を『中日大辞典』でひくと、「商店の主人・支配人、私有工商業の財産所有者・企業主」等とあるが、含蓄が深く多義的で、訳し難く、訳者は原語のままにとどめている。本書は、この現代老板という怪物のエネルギーで、「醜い商人」ぶりを赤裸々に暴き、痛烈に批判し、彼らに覚醒を求めた警世の書である。「ご期待を乞う。（十月刊行。定価一六〇〇円＋税）」

*
これは人を驚かす書名（『中国老板批判』）である。「批判」という言葉に文化大革命時の「大批判」が思い起こされる。「地主・富農・右派」、「牛鬼蛇神」たちは頭を垂れて

跪き、うしろ手に縛り上げられ告発罪文を背負われ、紅衛兵の激昂した唾と拳を甘んじて受けたのである。あの過ぎ去った時代は戻ってはこない。同様に「批判」という言葉も本来の面目を取り戻す時がきた。批判とは強弁で言い負かしたり、濡れ衣を着せることではない。「当然」を語るのではなく、「道理」を語って、事実にもとづく批評を行うことである。

「おまえはどんな資格をもって老板を批判するのか？ だいたい老板の経験があるのか？」

私が本書の構想を友人たちに明かしたとき、彼らは皆「このような疑問を私に投げかけた。そのとおり。私に老板の経験はない。私は自由に研究し、独自に思索し、ただ自分の手を使って文章を書くだけの人間である。しかし、このような立場にあるからこそ、私は老板たちの生き方に深い関心を覚え、彼ら自身も気づかない彼らの実態を見抜くことができるのである。いわゆる「当事者がどうしても解けない謎を傍観者が解く」ということである。

過去 雑誌・新聞記者として私は、様々な老板たちに接触する機会があり、どの教科書にも書かれていない少なからぬことを彼らから学んだ。その意味で私は彼らに借りがあり、今回は私のやり方でその借りを返そうと思う。すなわちペンをもって、私の彼らに対する印象を彼らに報告しようと思う。すでに多くの美辞麗句が老板たちに捧げられているため、私はさらに錦を添えようとも思わない。むしろ、それらの甘言包囲網の中にある彼らの大脳を覚醒させ、少々苦味のある言葉で彼らの神経を少し刺激してあげたい。

「おまえは紅眼病（羨望が強すぎるために眼が赤くなる病気）ではないのか？ リッチマンが憎いんだらどう？」

私の友人はまた、このように問い掛けてきた。確かに私は裕福とは言えないが、決して富裕を羨み、怨むものではない。他人の富裕がすなわち自分の貧乏とも思わないし、むしろ一人の億万長者は幾人かの千万長者を産み出し、千万長者はさらに多くの百万長者を産み出すものだと思っている。

私自身は天帝が私に一本のペンと靈感を与えてくれたのだと思うし、それで十分満足である。人はそれぞれの天分に従って生き、それぞれ異なった生活を送る。あたかも大自然に森林や草原、溪流や大海があるように、人類社会にも個性に満ち溢れた千差万別、多種多様な人生があるべきなのである。

ひるがえって、私は富裕を全く怨まないか、といわれると決してそうでもない。むしろ私は何故中国にはこんなに億万長者が少ないのか、中国の老板はどうしてこんなに貧しいのか、と訴えたい。私の知る限りでは米國『フォーチュン』誌の世界五〇〇大企業のうち、われわれのこの一二億人の大國の私営企業は一社もランキングされていない。全世界の億万長者個人のランキングにおいても、米國のゼネラルモーターズ總裁やマイクロソフト会長のビルゲイツはいうまでもなく、海外の華僑同胞に比較しても、われわれ中国人は全く比較にならない。私が現在手にしている米『フォーブス』誌に掲載されている十大華僑財閥を見て、最低でも七〇億米ドルの財産を所有して

る。しかるに、中國大陸の最大富豪といわれる劉永好ですら、その資産は一億米ドルであり、全く足元にも及ばないのである。

わが國の富豪は、われわれの狭い社会内の巨人ではあっても、世界の大舞台では微々たる存在にすぎず、われわれの百万長者は、先進國における中流階級にも及ばない。われわれは未だ「恐富」の時期にも至っていない。中国にはもっと多くの、さらに富裕な老板が必要である。鄧小平は「一部の人々をまず豊かにせよ」と号令をかけたが、私は大賛成である。いつまでもみな貧しい「貧困の平等」に甘んじていてはならない。みな先頭に、まず裕福な人たちを置くのだ。

ポイント是谁が、どのように、まず裕福になるかにある。なぜなら、裕福になるという目的だけであれば、銀行を襲うか、あるいは麻薬を売って金を儲けるのがもっとも手っ取り早いからである。中国は歴史的に人口が多いが資源は少なく、もともと財を成すには難しい環境にある。したがって老板たちの眼差しはもっぱら現在の富の分

配方法に注がれてきた。まさに米國の著名な歴史学者であるフェアバンク・キングいわく。

「中國商人は、一八世紀に古典經濟学者が賞賛した企業家像とは全く異なる考え方を持っている。古典派經濟学者の学説における『經濟人』とは産業生産を基盤とし、生産を増加することによって市場から利益を獲得するものである。しかし、中国における伝統的な『經濟人』が選択した最も有利な方法とは、生産を増加することではなく、すでに生産された富の中で、自分の取り分をいかに最大化するかという方法であった。彼らは自然を征服するでもなく、天然資源を開発するでもなく、技術を改善利用して新たな価値を創造することもせず、ただひたすら彼の近隣の友人たちと直接争って、財富を獲得してきたのである。この点から中国社会とは、昔から希少資源をめぐる多数の人間が争う經濟社会であり、大陸や新産業を發展させるための競争は経験してこなかったという事実を説明することができよう」

一般的に言って、原始的な資本蓄積の時期において、マフィアが金を儲ける。すなわち投機的利益の追求というのは普遍的な現象かもしれない。しかし、いったん一定の資本が蓄積されれば、それから生産を増加させることで社会的価値を創造し、そのような方法によってのみ企業は一層強大に発展していくのである。もしも依然として原始的な方法を利用して巧手略奪を図る企業があれば、そのような企業はもはや長続きするわけもなく、そのような老板はいずれ没落せざるを得ない。

おそらく、わが国の多数の老板は金儲けの方法は学んでいても、価値を創造する方法はまだ学んでいないのではなからうか？ 価値を創造することができない老板は真の企業家とは言えない。

わが国の経済では何故パブルばかり発生するのだろうか？ 原因のひとつとして、わが老板たちがいつも金銭遊戯に迷い込み、タダで泡銭を獲得する「空手道」に専念して、地道に価値を創造するための忍耐力を持たないからであろう。

それ故に、捏造して騙したほうが手っ取り早いということになる。それ故に、劣った偽物のほうが簡単に流通してしまう。それ故に、お互いに共食いすることになる。それ故に賄賂やりペイトを使うことに熱中する……

たとえて言えば、財産もさほど多くない家庭の中で、子供たちが家の財産を増やそうとは考えず、毎日どれだけ多くの財産を分捕るかしか考えていないようなものだ。こんなことでは兄弟喧嘩ばかりで家は貧しくなる一方であり、それで一人や二人の子供が少しばかり豊かになって何の意味があるのだろうか。

ひとつの国家の国民が、みな同胞の財布から金を掠め取ることばかり考えていたのでは、わずかな億万長者が生まれたとしても、その他の無数の人々は貧しくなるばかりである。中国経済の多くの問題はここに原因があるように思う。

わが国の多くの経済学者たちは数字遊戯に耽り、理論経済学の範疇の中で経済問題を解決する回答を探そつとしてている。彼ら

は多くの主張を唱え、制度改革によって中国経済を救い出そうと試みる。しかし、実際問題として、多くの問題の根元は「人」である。「人」の素質、つまり老板の素質如何であると言えよう。ここでいう老板とは基本的に私営企業の老板であるが、国有企業の「準老板」においても同様の問題は存在し、避けて通ることはできない。

過去、わが老板たちは政府の「対資本家政策」によって発展を制限され、手足を十分に広げることができなかったが、「中国共産党第十五回大会決定」（一九九七年）によって彼らは私営経済の面目をとりもどし、政府も私営経済の発展を促進しはじめた。しかし皮肉なことに、それからというもの私営企業は道をそれて没落を始め、多くの郷鎮企業は停滞の局面に陥り、落馬してしまつた老板たちも少なくない。これはいったい何故か？

牟其中の経営する南徳公司是借金が山積み。史玉柱の巨人公司是本社ビル建設で足を引つ張られ。三株公司是経営危機に瀕している……

『中国企業家』誌が一〇年前に報じた「全国優秀企業家」ベスト二〇名の現在を見てみよう。一人は病死、一人は亡命、三人はランクアップしたものの、五人は引退、六人は辞職、免職、停職等々……元の企業にとどまっているのはわずか四人にすぎない。国有企業の「準老板」たちも同じような運命にある。

経済環境の変化のせいにして、ああでもないこうでもない客観的な原因を論じるよりも、自己を変革することができないでいる老板たちは、まず自分自身の身の上とその原因を探るべきである。一部の「己を知る」老板はすでに反省を始めている。

飛龍集団総裁いわく、わが国の企業家の中には理性を持っていないと言えないものがある。賭博ばかりに走っている。彼ららたいていの戦術は、市場の隙間を狙って、一種類か二種類の格好の商品を見つけて売り込みをかけ、一挙に稼ぐやり方である。このような偶然的な成功法が徐々に企業家たち全体の趨勢となりつつあり、さらに賭博性を増しつつある。彼らの本来的な素質は

高いとは言えず、みな「はしか」にかかって、発作を起こし、はなはだしくは病毒に命を奪われてしまうものまでである。

巨人集団総裁いわく、わが国の企業には、軍隊組織に例えて四種類の企業が存在する。一つは「草寇」、すなわち血縁と任侠関係にすべて頼る企業で、最終目的は財産奪取にある。二つは「軍閥」、すなわち一定の規模と組織を持つてはいるが、容易に内部反乱を起こしたり分派を形成したりする。三つは「正規軍」であり、規律はしっかりしているが遠大な目標を持たない。しかし、四つめには広大な理想を堅持し天下の興亡を己の任務としているような企業もあり、このような企業こそが超大企業となることが出来る。

三株集団総裁いわく、金儲けすべきでないところで金儲けしてはならない。天下にはとりつくせないほどの黄金の畑がある。この世界に誘惑は多いが、自分の欲望をコントロールできる人物は多くはいない。

海星集団総裁いわく、牟其中は冒険精神が旺盛で、大きく飛躍することができた

が、彼とともに進み、彼の狂った妄想を実行しようという部下を持たなかった。史玉柱は良い人物だが、彼の欠点は人材管理が不得手であったことにあり、経営判断も幼稚であった。

四通集団総裁いわく、中国における現代企業というものは我々一代のうちには完成できないだろう。我々は過渡期に生きる人物なのである。

いずれにせよ、彼らのような高い水準の冴え渡った自己意識、自己批判精神の中にこそ、中国老板の希望がある。しかし、残念なことではあるが、彼らのような自覚と反省意識が大多数の現代老板たちには欠けているのである。

私の知り合いの老板に、八〇年代初頭に小規模な採炭業で財を成した郷鎮企業の老板がいる。彼は自分の姓名以外の文字は少しか知らないが、常に大学卒の社員に対してこう自慢していた。「俺は字を読めない。しかし、お前たちのような秀才の老板をしているじゃないか。」また、ある老板は金儲けのコツを語るとき、よくこう言っ

いた。「私はまじめに企業を興そうとする人は馬鹿だと思つ。嘘ではない。私の秘訣は、金儲けは借金に如かず、借金は返済しないことに如かずである」。

また、ある老板は何か重要な決断を迫られたときは、つねに占い師に頼っていた。

儒教では「日にわが身を三省す」という。中国の伝統文化は常に自分を省みることにあつたが、今日ではほとんど失われてしまった。何千年も支配されることに慣れてしまった「中国順民」はみずから自分を主宰することができず、独立した人格を持たず、責任感もない。いつも他人を責め、外部の客観条件に原因を帰し、みずから反省することを少しもしたくないし、自分の中に原因を探そうともしない。

われわれは常に賞賛の歌を聴きたいし、すてにある実績の中で自己陶醉したい。これは、たとえ四面楚歌の危機にあつても歌い踊る幻想に浸っていたという現象である。これはもつとも愚劣な楽観主義であり、もつとも恐るべき情性である。

自己反省の意識を持たない民族は近視眼

的民族である。自己批判の勇氣を持たない老板はいずれ頭をぶつけて血を流す羽目になる。老板たちに反省意識が欠けているだけではない。われわれの社会にも一種の批判意識が欠乏しているのである。われわれの新聞、テレビも老板たちを神格化して賞賛し、さらには彼らから賛助金を受け取つて天の上のままで祭り上げ、そのために「企業家」という無意味な祝詞まで作り出しているが、その内容たるや文化大革命時代の「高く大きく全く」式の「労働模範」捏造方式と大差はなく、あまりにもみつともない。老板たちにしたところで、その柔らかない、甘美な蜜のような賞賛の歌声の中で、冷静に自己を振り返ってみるといふのも無理な話かもしれない。

そこで私は、馬耳東風かもしれないが敢えてペンをとり、老板たちに関する私の所見、所聞、所感、所思について真実を記録したい。これがアルコールと女に麻痺した中国老板族の神経を少しでも刺激できればと希望する。すなわち「中国老板批判」である。

武俊平（寛武雄訳）

武俊平著／寛武雄訳

醜い中国商人

私営企業経営者の実像「十月刊」

A5判三二〇頁定価二六〇〇円＋税

本書は「身内の恥」を敢えて家の外に曝け出したものである。街頭の屋台のオヤジ、チンピラのボスから大企業集団の総裁まで、中国語で「老板」（ラオパン）と呼ばれる種族の「醜い商人」ぶりを、鋭くえぐり出すように描いている。日本人は、これを読んで中国の官僚、経営者、ビジネスマン、庶民の「商人文化」の考え方や行動原理に改めて驚嘆せずにはおれないであろう。本書は、中国ミク口経済の生きた見本であり、中国人を理解する絶好の入門書でもある。

《主要目次》

- 1 玉石混淆の老板族
 - 2 老板族に対する様々な見方
 - 3 価値観の偏った老板族
 - 4 官商癒着の老板族
 - 5 騙し騙される老板族
 - 6 老板族の錬金術
 - 7 骨を砕いて髓を吸う老板族
 - 8 近視眼の老板族
 - 9 小富で満足する老板族
- 結・老板族よ何処へ行く